

見晴山をめぐるって

すずき・くにてる
1954年北海道上川郡下川町生まれ。
1977年立命館大学文学部地理学科卒業、同年より名寄市役所（図書館郷土資料室係）。
1982年自然観察指導員。
1995年名寄市北国博物館、学芸員・業務係長。
現在に至る。

鈴木邦輝

一、見晴山の山

名寄市街地の東方約4kmに標高四一八mのピークをもつ山がある。山といっても東西南面がほぼ垂直におちる崖状の岩塊で、遠目ながら国道二三九号線から目立って見える。このランドマーク的な形から「見晴山（みはらしやま）」の名がつけられ、地元の人には「ガンケ山」とも呼んでいる。網走地方の遠軽町のシンボルとなっている瞰望岩を想像してもらったらい。

一帯は北東にあるピヤシリ山（九八六・六m）の裾野にあたり、少し北にある国内ジャンプ初戦が開催されるピヤシリスキー場も含めて国有林内にある。ピヤシリ山は約一三五〇万年前に噴出した溶岩の山で、裾野の山も若干の時間差はあるが、同様の成り立ちをもつ。見晴山の場合、尾根でつながる円山（五四〇・四m）と同じ溶岩で出来ており、本峰は名の通りゆるやかな山容だが、尾根末端の見晴山にきて崖状に落ちて溶岩の固まった安山岩の露頭となっている。

二、見晴山とのふれあい

この山には、先住のアイヌの人たちがつけたアイヌ語地名がチシ（立岩）として古い地図に残っており、狩や採集の時の目印であったと考えられる。開拓以後は人里から近く、標高のわりに眺望がすばらしいことから、ハイキング、軽登山の場所として利用された。山頂へは西の林道をつめ、斜面から北側の尾根に出るコースと、南の川沿いの林道から崖面を登るコースがある。山頂部にはヤマハナソウ、ベンケイソウ、シダ類の他に少ないながらエゾムラサキツツジなどがある。野鳥はクマゲラ、アカゲラ、オオルリ、カワガラス、キセ

キレイなどがよく観察され、林道にはエゾライチョウもよく出てくる。頂上の露頭からは南西に名寄市街が見え、足元に注意が必要だが約五〇mの真下には針広混交林を眼下に観察できる。

近年は山菜取りを兼ねたハイキングや市内の自然観察団体が行なう自然観察のフィールドとしても利用されている。一方、昭和三〇年代からはこの垂直の崖面を利用して、陸上自衛隊名寄駐屯地のレンジャー訓練が行なわれており、同六〇年頃からはこれに加えてフリークライミングのルートが四〇ルートほど開かれた。関係者によると、年間に主に道内の一〇〇パーティー以上が利用しているという。

三、見晴山の採石

平成九年一月二六日付の地元新聞・名寄新聞に「見晴山で採石を検討・名寄営林署・高速道路への資材提供」という記事が掲載された。内容は北海道開発建設部が工事を進めている高規格道路の路盤材に硬く良質の石が必要で、関係方面から見晴山での採石の打診がある事。営林署としても保安林等の法的規制もないため、採石を検討しているなどである。たまたま来訪した地元紙の記者の取材に応じたもので、他紙には報道されなかった。名寄市には市内の五つの自然観察団体の連絡組織として「名寄自然に親しむ会」（佐々木隆元会長）がある。会は一九八五年に設立され、地域の自然調査を中心に自然保護・保全の問題についても話し合いや提言等を行ってきた。私も事務局の一員で、役員と相談しとりあえず詳しい点の確認のための話し合いを営林署に打診した。お越しいただければお話をするとので、二月

十八日に役員等十五名で営林署を訪れ、署長、次長が対応していただいた。一時間弱の話し合いをもち、署長からは関係方面からの要請で検討している最中で、署が主体となり積極的に行なおうとしている事業ではない。しかし採石の需要が公共事業でもあり、手続き上の問題がなければ地域の意見も参考にしつつ進めたい。とりあえず現地のボーリング調査をして、高規格道路の基準に耐えられる岩石かどうかの判断を下したいとの事であった。会としては意見集約をしていないが、採石は好ましい事とは考えていない旨を伝え、ボーリング等の推移を見守る事として話し合いを終えた。

その後営林署では地上部の見晴山本体部は残す方向で、周囲の地下を二六mまでボーリング調査をした結果、期待していた硬質な安山岩ではなく砂岩であったため、見晴山での採石は行なわれない結論を下した。この経緯も名寄新聞の六月一日付に「見晴山周辺の採石を断念・ボーリングで砂岩判明・名寄営林署・自然保護問題も同時決着」の見出しで報道された。

会としては自然保護を前面にした反対ではなく、地域に親しまれてきたシンボルとしての見晴山の問題として、市民からの自発的な動きを期待しつつ表立った動きもなく経過した。市民の反応も個人的に反対の方は多いが静観と言って良い雰囲気であった。この間、反対の活動を要請書の署名とともに最も意欲的に行なったのはフリークライミングの方で、インターネットを利用したり、全国誌の山岳雑誌に採石反対を訴える記事の掲載などがなされた。何かとしがらみがある地元の間人の反応が面白い一方、フリークライマーの方々の

反対の強い意志表示が、今回の採石問題の推移・展開に果たした役割は大きい。

四、身近な自然としての見晴山

名寄市を含めた天塩川中・上流域は、その一部は道立公園に指定されているものの、大きな山や火山、そして湖沼などの特に北海道らしさを象徴する自然があるわけではない。ゆえにスキー場、景勝地にねらいをつけた観光資本に選択されなかった地でもある。また、公共事業に開発しつくされている訳でもない。むしろ国有林、道有林が多く、また北海道大学の演習林もあり山地は自然度が高いと考えてよい。

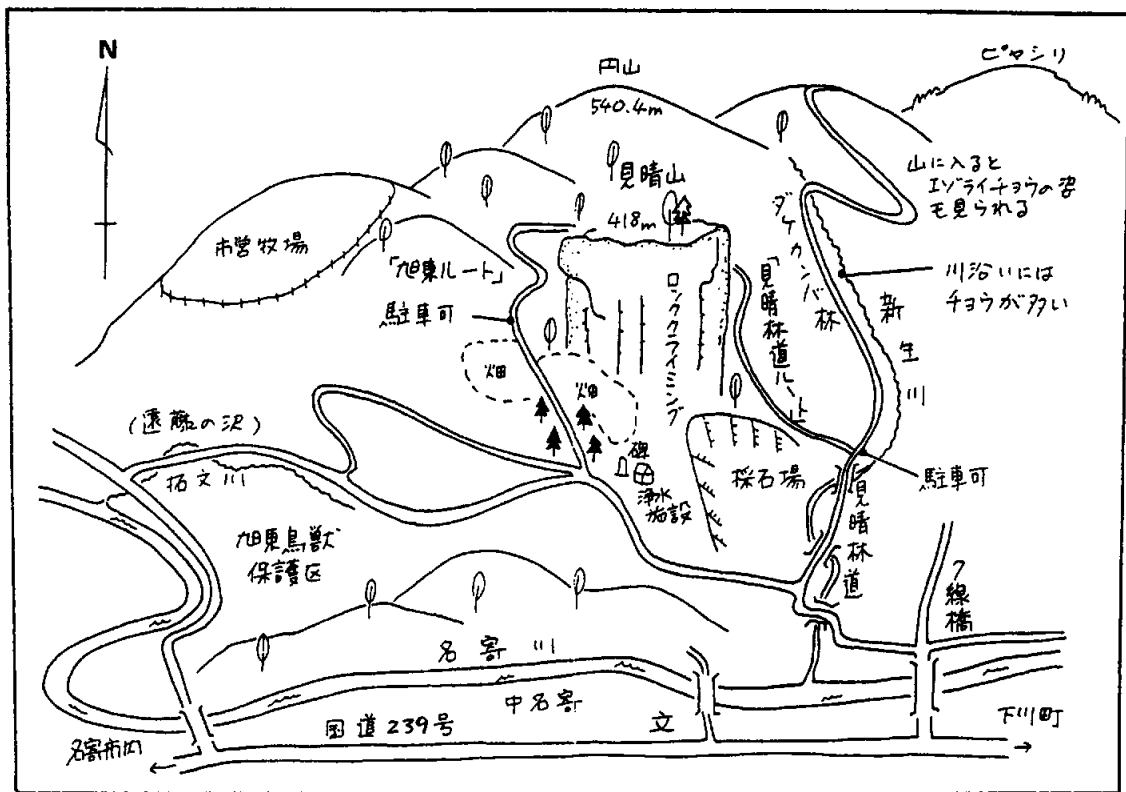
この地味な自然（これこそ北海道らしい自然と思うが…）の中に約一〇万人が住み、過疎と言われるが住んでいる人は暮らしやすいと考えている。最も良い事は、自然度の高い所へ居住地から短時間で行ける事である。見晴山もそんな距離にある自然度の高いスポットである。そこに開発行為の話が持ち上がってはじめて、良い場所が身近にあるとそこに住む人たちに知らせてくれた形となった。その様な身近な自然をより多くの人たちに知ってもらうために「名寄自然に親しむ会」の構成団体である「道北自然観察指導員会」が自然の好スポットを紹介した「なよろフィールドマップ」を三年前に作成していた。見晴山ももちろん載っている。中の自然情報には「名寄野鳥の会」や「なよろ野の花の会」のデータも取り入れてあるが、残念ながら今回採石を企画した人の目には触れていなかった様である。身近な自然をまわりのひとりでも多くの仲間知らせる事、また知ろうとする事の大切さを今回の問題は改めて教えてくれた

気がする。

ちなみに平成九年十月六日の名寄新聞には「空間利用林の指定を・旭川営林支局・名寄見晴山の保全」との見出しが踊った。国有林の第二次施業管理計画を来年からはじめるにあたり、レクリエーションとして地域の人々に解散、活用していく空間利用林としての指定を検討しているとのもの。採石をめぐる揺れた見晴山もやっとしていい事であろう。



見晴山での観察会



「なよろフィールドマップ」(1994年) 道北自然観察指導員会より

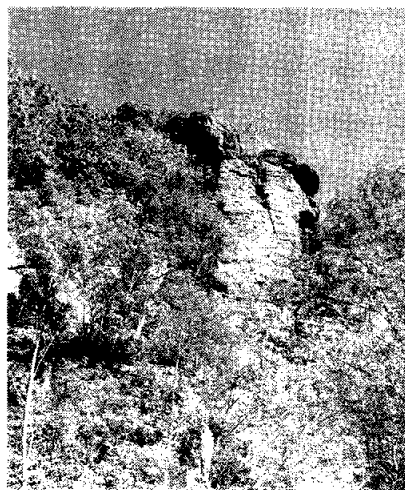
北海道・名寄の見晴岩が採石の危機に 反対の署名運動がおこる

国内最難ルート「ハードラック・トゥーミー」
(写真=小松山 茂)

全国的フリークライマーに知られている北海道名寄市の見晴岩が採石の危機に瀕している。97年1月26日の名寄新聞によると、名寄市域に建設されている道路などの建設資材として、名寄管林署管内の見晴岩からの採石が検討されているとのことである。

見晴岩は30年以上にわたり、ロッククライミングのゲレンデとして、北海道のクライマーに愛されてきた。近年はフリークライミングの岩場として知られている。また、周辺は名寄市民にとっても憩いの場でもある。

見晴岩を採石から守るために、旭川市在住の吉田和正さんを中心に、採石反対の署名活動が始まった。署名は旭川秀岳荘、札幌秀岳荘、クラブソル札幌、そのほか全国のクライミングジムで取り扱っている。問合せ先は旭川秀岳荘 ☎0166・61・1930



見晴山